（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　佐髙春音

本論文は、物語論（ナラトロジー）の観点から、中国明清時代に刊行された長編白話小説『水滸伝』『三国志演義』における「物語の語り方」について、主として地の文を対象に分析を試みたものである。

第一章では、容与堂本『水滸伝』において、語り手が作中人物の性格・性質について直接説明する地の文が、男女の色事に関わる回と場面に集中していることを指摘した。

第二章では、容与堂本『水滸伝』を材料に、地の文において「這廝」「那廝」「賊禿」「賊臣」など、人を罵ったり貶めたりする呼称が用いられる例について分析し、やはりその対象には、閻婆惜と張文遠、潘金蓮と西門慶など、色事や悪女に関連する場面に集中して用いられる偏りがあることを指摘する。重要な指摘であり、これらの特徴は、『水滸伝』の作品生成過程の研究にも新たな道を開きうる知見といえる。

第三章では、金聖歎本『水滸伝』の評語に散見する、作中人物の「眼中」に関わる批評に着目して考察を行う。金聖歎は「作中人物＋知覚動詞」「只見」に続く文を、作中人物の「眼中」を示すものと見なしており、「眼中」のタームが、作中人物の知覚ばかりでなく、心理や思考が反映されていることを明らかにし、これが物語論における「視点」に近似する概念だとの重要な指摘をしている。

第四章では、毛宗崗本『三国志演義』を対象に、同じく「視点」の問題を扱う。毛宗崗本より前の版本では、「作中人物が見た」ことが示唆された後、その人物が見ても知覚・認識できないはずの情報が続けて示されることがあった。毛宗崗本に至るとそうした不合理は解消する。毛宗崗本の批評のスタイルは、「視点」に関わる文章観の点でも、金聖歎の影響を受けていることが明らかになった。

第五章では、人物が作中に登場してくる場面で、どのように存在を指示し情報を紹介されるかという作中人物導入の方法について、史書『三国志』、『三国志平話』、また『三国志演義』の各版本を比較考察し、初出の人物をいきなり固有名詞によって指示するスタイルから、不定の存在として指示した後で固有名詞を明かすスタイルへの変遷が見られること、また、毛宗崗本より前の版本では、既に姓・名・字・出身地などが紹介されている人物に対し、地の文で再度同様の情報を列記するケースがしばしば見られたが、毛宗崗本ではそれらの重複のほとんどが解消されており、表現の合理化が進んでいることを明らかにした。

審査では、概念規定や文章表現の曖昧な点も指摘されたが、全体の価値を損なうものではなく、本論文によって明らかにされた、『水滸伝』『三国志演義』の、従来論じられなかったいくつかの「語り」の特質は、物語論的研究のみならず、作品生成過程の研究、版本研究にも資する新知見であり、白話小説作品研究への新たな展望を開いたものとして、博士（文学）の学位に十分値するとの結論に至った。